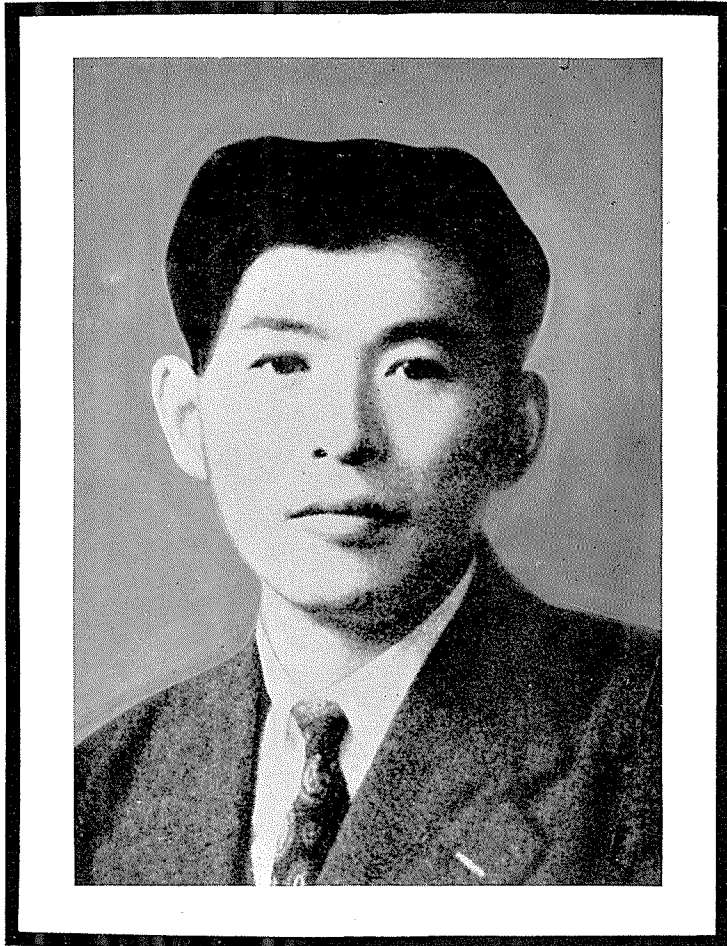




Title	萩原晰二教授の死をいたむ
Author(s)	吉田, 順五
Description	萩原晰二の肖像有
Citation	低温科学. 物理篇, 12
Issue Date	1954-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/17884
Type	other
File Information	012.pdf





荻原晰二教授の死をいたむ

當研究所々員荻原晰二教授は、昭和29年1月25日の朝、郷里の長野縣佐久郡前山村でなくなつた。1月16日の土曜日は、われわれ研究所のものたちが最後に荻原教授を見た日になつてしまつた。翌17日の日曜日、同教授はいつもとかわらない元氣なすがたで札幌をたつた。そして、旅先で突然に發病し、數日にわたる昏睡状態をつづけたのち、ついに25日になくなつたのである。

同教授は雲の物理學の研究によつて、はやくから、その名が學會に知られていた。松本高等學校から東北大學理學部物理學科にすすみ、昭和~~25~~26年3月卒業して、ただちに東京の中央氣象臺にはいつた。その後、昭和21年までひきつづき氣象臺に籍をおき、昭和18年から21年までは札幌管區氣象臺に勤務した。そのあいだ、われわれ低溫科學研究所員と親しくつきあい、おなじ種類の研究にたずさわるもの同志として、意見をかわし互にはげましあつていたのである。昭和21年、東北大學助教授として仙臺にいつてからも、われわれとのあいだの研究論文の交換は活潑におこなわれてかたい接觸がたもたれ、ついに、昭和28年3月、われわれは同助教授を低溫科學研究所の教授としてむかえるにいたつた。

雲の物理學は、現在 氣象學のうち大きな地歩をしめている。ながいあいだ、この方面に多くの業績をのこしてきた荻原教授は、われわれのところへ來てからも、ただちに北海道のような寒地においての雲の物理學の研究にとりかかつた。1月17日、荻原教授がやむをえない所用のため札幌をたつたのも、石狩川の川霧を利用しての研究のさなかのことだつたのである。

われわれの友人としての荻原教授の死を悲しみ、すぐれた研究者としての荻原教授の死を惜しむ言葉は、書きつらねても果しのないことであらう。われわれの研究は人類の平和と幸福のためのものである。それゆえにこそ、遅々としてではあるが、たえまなく、進めつつある低溫科學を、われわれの頭のなかに、いきいきと生かしておかなければならない。そうしておけば、たとえ個々の研究者に不幸がみまおうとも、われわれの仕事はつぎつぎに傳えられて成長してゆくであらう。荻原教授ののこした業績も、それとともにいつまでも生命を保つのである。

昭和29年3月

吉 田 順 五